

今まで私は、なんとなく「がん死」なんだと勝手に思っていました。しかし、著者はがんと診断されながらも職場復帰を果たし、新聞記者として社会にがん患者の思いやがん治療に関する情報を発信しています。この本は、前半は著者自身の体験をつづった章、後半は著者が取材し毎日新聞に掲載されたものを加筆修正した章となっています。

「100人のがん患者がいたら、100通りのがんがある」と書かれているように、状況も考え方も本当に様々な人がいることがわかります。ただ、多くの人に共通しているのは、「がんと共に生きる」という覚悟を決めているということ。がんは、完治が難しく転移や再発の可能性もある病気です。しかし、だからといってがんと診断された瞬間に残りの人生を全て諦めなければいけないわけはありません。しかしそのためには医師と患者の相互理解と、社会の支えが必要です。がんは他人事ではありません。いつかの自分のために、今読んで欲しい1冊です。(丸山)

TRYTRYBOOK ③

『おとぎ話の忘れ物』は、小川洋子さんが樋上公美子さんの絵にインスピレーションを得て書き下ろした、現代版おとぎ話集です。今回はその中から「人魚宝石職人の一生」に出てくる、人魚のヒレ輪をイメージして作ってみました。

このお話によると、人魚には男性もいますが、王様以外はすべて女性の人魚に奉仕するための役割があります。主人公にとって、それは宝飾品作りでした。真珠はもちろんのこと、「イソギンチャクの毒針」「夜光虫の退化した眼球」「三葉虫の甲羅」など、海底を探索して掘り出された美しい宝石が、人魚の体を飾るのです。彼が仕えていたお姫様は、星の形をしたヒトデの宝飾品を好んだそうです。私には彼ほどの技術も根気も無いので、身近な所で手に入れたビーズを使って、小さな輪を作るので精いっぱいでした。

今までアクセサリーに興味はありませんでしたが、献身的な奉仕によって生み出される海の宝飾品は、一度身につけてみたいものです。(丸山)



やよい TOPIX 本と出会う。

「それでも人生は続く。」



① 『乳がんが生きる』
ステージ4記者の「現場」
毎日新聞生活報道部/著 毎日新聞出版

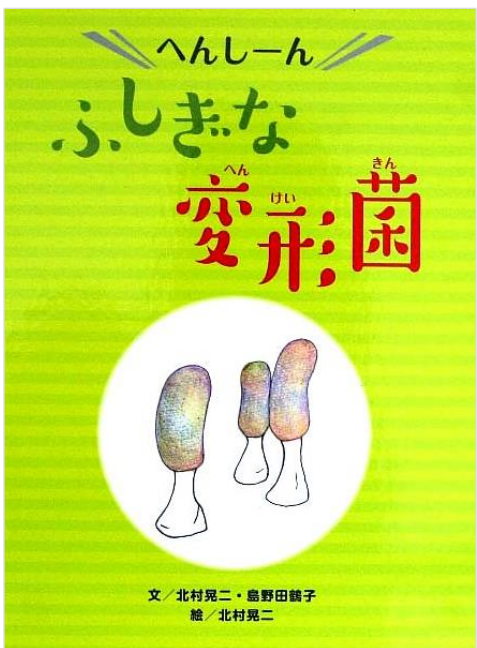


② 『とうだい』
斎藤 倫/文 福音館書店

こんな本もありますよ！
窪川勝哉のひらめきキッククリンテリア
窪川 勝哉/著 ソフトバンククリエイティブ
『眩(くらら)』
朝井 まかて/著 新潮社



③ 『おとぎ話の忘れ物』
小川洋子/著 樋上公美子/絵
ホー乱社



④ 『へんしーん ふしぎな変形菌』
北村晃二・島野田 鶴子/文
国立科学博物館はくポランティア

読書の窓 ②

1879年10月21日、アメリカの発明王エジソンが白熱電球を完成させました。それにちなんで、日本電気協会が1981年に「あかりの日」を制定しました。小学生向けのポスターコンクールも開催しているそうです。

ということで、今月のテーマは「あかり」。懐中電灯やイルミネーション、シャンデリア等、照明機器の種類は数多くありますが、その中でも特に大きなあかり——「灯台」が主人公の絵本を紹介します。岬に新しく建てられた1本の灯台は、冬のある日、渡り鳥から遠い世界の話が聞きます。都会のビル街や工場地帯を自由に飛び回り、旅を続ける鳥たち。見たこともない景色を語ってもらう度に、灯台は喜びます。しかし、渡り鳥が去った春に、灯台は自分がその場から動けないことに気が付きました。そして季節は巡り、2度目の冬がやってきて…。

柔らかなイラストと優しい語り口の作品です。灯台と渡り鳥の可愛さに思わず胸キュン。大人にもオススメです。(新井)

再生館 セレクト ④

小さい！きれいな！形が変わる！
「へんしーん ふしぎな変形菌」
皆さんは変形菌をご存知ですか？アメーバのように動き、キノコのように胞子を飛ばす。そして動物でもない、植物でもない不思議な小さな生きもの、これが変形菌です。

森にカプトムシを探しに出かけた子どもたちが倒れた木に変形菌を見つけ、持ち帰って観察するところからお話が始まります。変形菌が様々な形を変えることや、いろんな仲間があることなどがわかりやすく描かれており、私たちも森に出かけたくくなります。

この絵本は変形菌の面白さを子どもたちに知ってもらうために国立科学博物館の仲間によって作られました。あだち再生館の図書コーナーに置いてありますので、ぜひどうぞ。(再生館職員)

※足立区内の図書館では所蔵しておりません。ご了承ください。